
家に帰ると娘が必ず死んだふりをしています。

食器野さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家に帰ると娘が必ず死んだふりをしています。

【Nコード】

N1422S

【作者名】

食器野さら

【あらすじ】

六課解散から一年、J・S・事件が大分落ち着いてきた頃。なのとはとフェイトが家に帰ると……。

(前書き)

初音ミクの『家に帰ると妻が必ず死んだふりをしています』を聞いてたら出来上がった作品。

暇つぶし程度に見ていただくと幸いです。

4 / 4 .. 後半の歌詞を一部修正。

「なのは、久しぶりに一緒に帰らない？ ヴィヴィオの顔も見たいし」
「そうだね、いいよ」

J・S・事件から一年。

六課が解散してから今まで事件の後始末でバタバタしてて。
それがやっと一段落してきた。
今はフェイトちゃんと一緒に自宅に帰っている。

「ただいま」

「ヴィヴィオいる？」

今日は久しぶりに夕方に帰ってこれた。

真っ直ぐに飛び込んでくるだろう娘の姿を想像して、すぐにかき消した。

最近、その娘にどうも困った癖というか、趣味が出来てしまったのだから。

「ヴィヴィ・・・・・・・・っ!!？」

あーあ、やっぱりか。

フェイトちゃんが隣で固まってる。

目の前で娘――ヴィヴィオが倒れてる。

背中には包丁が突き刺さっていた。

ご丁寧に床は血まみれだ。

・・・・・・・・うん、何も知らないご近所さんとかが見たら気絶させちゃいそうだな。

「ヴィ、ヴィヴィオ？ヴィヴィオ！？」

慌てたフェイトちゃんがヴィヴィオに駆け寄る。

まあ、この反応が普通だろうね。

けどもう慣れちゃったというか何と言うか・・・・・・・・・・。

「にやははっ、今日のは掃除が大変そうだ」

「な、なのは！ちょっと冷たくない！？」

すごく真面目な顔で責めてきたフェイトちゃんを目でなだめる。

ふと、ヴィヴィオにあてていた手が震えてるのを感じた。

もちろんわたしは動かしていない。

ヴィヴィオを、じっと見る。

「・・・・・・・・くっ・・・・・・・・ふふっ」

満足そうに笑っていた。

「もう！びっくりしたよ！？」

「あはは、ごめんねフェイトママ」

汚れた玄関を三人で片付けてから、リビングに入ったとき。

フェイトちゃんの第一声がそれだった。

ヴィヴィオは苦笑いして、わたしが入れた紅茶をフェイトちゃんに運ぶ。

「・・・・・・・・ふう、なのはもなのはだよ！びっくりしないの？」

受け取ったそれを一口飲んでから、お小言の矛先がわたしに向けられた。

「なれてるから」

「なれてるって・・・・・・・・」

即答でそう返して、お皿に盛り付けたお菓子をテーブルに乗せた。

フェイトちゃんを見ると、その顔は呆れている。

思わず、笑ってしまった。

「ヴィヴィオ、宿題はやった？」

「あ、ごめん！今から！」

そう返事して、ヴィヴィオは部屋に走っていった。

「ヴィヴィオ、いつからあんなことするようになったの？」

「半年くらい前からかな、家に帰ると必ず死んだふりしてるんだよ」

記憶が正しければ、ね。

最初の頃は流石に焦ったなあ。

正座でお説教したっけ。

「いつもあんな感じ？」

「最近はね、頭に矢が刺さってたり、レイジングハートのレプリカ抱えてたり、うさぎの着ぐるみ来てたときはドア閉めようかって思ったっけ」

今思うといい思い出だ。

「ちょっと誉めるとすぐに調子に乗るから、出来るだけスルーしてるんだけどね」

「調子に乗るって……例えば？」

思い出しながら、

「この間誉めたら、フェイトちゃんの格好でバルディッシュ・ライオット抱えてたっけ？」

「え」

にやはは、びっくりしてるびっくりしてる。

「けど、困ることとかあるでしょ？」

「あるある！後片付け結構大変だし、あと頭に矢が刺さったまま、おやつほおぼるのはちょっと勘弁して欲しいかも」

言っているのは困ることのはずなのに、顔に出ているのは笑顔だ。フェイトちゃんは心配そうな表情を変えないまま、

「でも、やっぱり直したほうが……」

「大丈夫だよ、そのうち飽きるだろうし」

お茶を飲んでからフェイトちゃんを見ると、まだ難しそうな顔をしていた。

ふふっと笑ってから、

「・・・・・・・・六課のころは職場と住んでるところが一緒になってたから、どんなに忙しくても一緒にいてあげられた」

あの時を思い出しながら、わたしは話す。

ピーマンを克服したときのこと、寝るときに絵本を読んであげたこと。

今でも昨日のことみたいに思い出せる。

「最後の模擬戦のあともね、『ママすごかったよ』って誉めてくれたの」

本当に無邪気に笑ってて、見てるこっちも嬉しかった。

・・・・・・・・でも・・・・・・・・。

「六課が終わってから、事件の後始末でバタバタしてたでしょ？それで、ちよっと寂しい思いさせちゃってたみたいで・・・・・・・・」

真夜中に帰ることが多くなって、同じくらいにあの子を家で一人にさせることが多くなって・・・・・・・・。

わたしだって小さい頃同じ思いをしてたのに、それを忘れていた。

「だから、帰ってくるたびに死んだふりで出迎えてくれるのは、あの子なりに考えた甘え方なのかもしれないね」

今まで話を聞いてくれたフェイトちゃんは、小さく笑っていた。

「なのはママ、フェイトママ？」

宿題が終わったのか、ヴィヴィオが頭にはてなを浮かべてわたし達をのぞきこんでいた。

「さてと、晩御飯にしようか？フエイトちゃんも一緒にどう？」
「あ、うん」

笑いかけてから、三人でキッチンに行く。

献立をどうしようか話しながら、暖かい時間を過ごした。

ドアを開けたら娘倒れてる

背中突き刺さる包丁

床は血まみれ

知らない人が見たら気絶するかもしれない

わたしは落ち着き

「今日のは掃除が大変そうだ」

と笑うと

娘はうつ伏せのまま満足そうに

クククと笑ってた

家に帰ると娘が必ず死んだ振りをしています

明日はどんな死に方しているのか

予想すら出来ない

ある日は頭に矢が刺さってたり

レイジングハート抱えてたり

ウサギの着ぐるみが死んでた時は

ドア閉めようかと思った

後片付けも結構大変で

床の血潮を洗ったり

矢が刺さったままおやつ頬張るのは

勘弁して欲しい

家に帰ると娘が必ず死んだふりをしています

ちよつと誉めると調子にのるから

できるだけスルーで

六課時代はどんなに忙しくても

一緒にいてあげられた

全力全開の模擬戦の後も

無邪気に笑っていたね

事件の後始末

定時をすぎても帰ろうとは

考えなかった

家で一人待つ娘の寂しさを

分かってなかった

家に帰ると娘が死んだふりで

待っているのは

あの子なりに甘え方を考えた

結果かも知れない

家に帰ったわたし待ってる

娘の演技見るのが

わたし達親子の絆ならば

それはそれでありでしょう

家に帰ると娘が必ず死んだふりをしています

今日はどんな死に方しているのか

期待して開けるドア

「ただいま〜！」

(後書き)

感想お待ちします
W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1422s/>

家に帰ると娘が必ず死んだふりをしています。

2011年10月7日08時21分発行